「若者の労働運動」の社会学的研究

橋口 昌治

本稿の第一の目的は，日常生活世界における個別具体的文脈の下で生きる自死遺族たちが，〈常識知〉としての自殺動機をいかように付与し，いかなる責任帰属 本研究の目的は、2000年以降に活発化している「若者の労働運動」の実態と特質を明らかにすることである。研究対象は首都圏青年ユニオン、フリーター全般労働組合、ユニオンぼちぼち、フリーターユニオン福岡であり、主に組合員に対するインタビュー調査の結果を基づき分析する。

第1章では、労働社会の変容というマクロな社会変動の中に「若者の労働運動」を位置づける。労働社会を、近代以降の労働を中心とした社会と20世紀以降の雇用労働を中心とした社会の2つに区別する。近代の労働中心性への批判と雇用制度の動揺が見られる一方、実生活レベルにおける両者の強固さが維持されていることを、労働社会の変容と捉える。そうした状況が、社会運動ユニオニズムの一種とも言える「若者の労働運動」を生じさせたのである。

第2章では、ユニオンぼちぼちの事例研究をもとに「若者の労働運動」の系譜を確認する。若者が労働運動を始めようとしたときに参考にしたのが、コミュニティ・ユニオンであった。両者の出会う条件として、労働運動と社会運動が混在する地域の運動状況があったことを明らかにする。

コミュニティ・ユニオンは個別労使紛争の解決力において高い評価を得てきたが、組合員を定着させることに苦労してきた。それに対し「若者の労働運動」では組合員の高い定着率が見られる。そこで第3章では、首都圏青年ユニオンの事例を通して定着率を高める柔軟な組織運営を明らかにする。

第4章では、フリーター全般労働組合の事例を通して、「若者の労働運動」のアイデンティティ戦略を明らかにする。「若者の労働運動」では、「プレカリアート」など新しい集合的アイデンティティの創造が重要になっている。一方、集合的アイデンティティと個人的アイデンティティの間の葛藤も見られる。その葛藤のあり様を「経験運動」概念を参照し分析する。

変容する労働社会では、労働と生存の関係性が改めて問い直されている。また「若者の労働運動」には引きこもり経験者や長期失業者など、社会的に周辺化された人々が参加している。第5章では、「労働／生存組合」を名乗るフリーターユニオン福岡の事例研究に、彼ら彼女ら労働運動に何を求めているのかを分析する。

以上の考察を通して、労働社会の変容を背景として、労働運動と社会運動の交差する地点に活動領域を見出している「若者の労働運動」の特徴を明らかにする。